

# 新任保育士にとっての困難に関する一考察

——新任保育所保育士調査への計量テキスト分析に基づいて——

桑 畑 洋 一 郎

## 要 旨

賃金の問題を主として、保育労働における労働環境上の困難が近年注目されている。一方で、特に新任保育士において、保育労働の「専門性」に関わる困難も存在することがいくつかの研究からは示唆されている。しかしながら、保育労働の「専門性」に関わる困難については未開拓な部分も多い。そこで本研究は、新任保育士が抱える保育労働の「専門性」に関わる困難を計量テキスト分析によって明らかにすることを目的とする。

結果、新任保育士は3歳未満児クラスに配属されがちであること、新任保育士が抱える困難は、担当する乳幼児の年齢によって差異があることが明らかとなった。

キーワード：新任保育士、保育労働の困難、計量テキスト分析

## 1. はじめに：問題の所在と研究の目的

本研究は、勤務し始めて間もない保育士たちが、保育労働の「専門性」をめぐるどのような困難を抱えているのか、計量テキスト分析ソフトを用いて探索的に分析するものである。

従来、保育士を対象とした公的な調査では、保育士の離職を抑制するための解決策を講じる文脈で、主に賃金や勤務時間など労働環境面に困難が存在すること、しかしその一方で、保育士としての業務の中身そのものについては、やりがいがあると認識されていることが指摘されてきた（東京都福祉保健局 2014）。それを受けて、保育労働に関する研究も、その多くが、主に賃金・勤務時間・健康保持といった、労働環境の観点からその厳しさを明らかにし改善の必要性を指摘するものとなっている（萩原・増淵 2012）。また、西阪（2010）は、主に幼稚園教諭に注目し、職務上のストレスと労働環境との関連性を論じている。以上のように、保育労働の環境をめぐる困難については、研究が蓄積されてきている。

しかしながら、たとえば全国保育士養成協議会が、「保育者の専門性<sup>(1)</sup>は「保育士養成施設と保育現場」とが「協働することによってのみ実を結ぶ」（全国保育士養成協議会 2013: 17）と指摘することに鑑みれば、「保育士養成施設と保育現場」が検討すべき保育労働上の困難が「保育

者の専門性」においても存在するといえる。すなわち、保育労働の「専門性」の点で、養成段階と保育現場とではギャップがあり、入職間もない保育士たちがそのギャップに困難を感じているということである。こうした困難は、賃金や勤務時間などの労働環境上の困難とは性質が異なる。

こうした状況に対し、全国保育士養成協議会においても、保育労働の「専門性」をめぐる存在する、養成校と現場のギャップを明らかにするための大規模調査が行われた。結果、「保育者基礎力」や「保育者の専門的知識・技能」など保育者に求められる「専門性」を、養成校と現場どちらが育てるべきか、認識にギャップが存在している部分が多いことが明らかとなった（全国保育士養成協議会 2013: 155-8）。このことの裏を返せば、養成校を経て現場に入職していく新任保育士たちは、保育労働の「専門性」をめぐるギャップの只中に置かれながら保育を通して子どもと関わっている状況にあると言える。このように、労働環境をめぐる困難だけでなく、保育労働の「専門性」に関わる困難とそこから生じるギャップに注目が集まっている。

しかしながら、保育労働の「専門性」に基づいて、養成校と現場とにギャップがあることは明らかにされ始めているものの、特に新任・若手の保育士たちの認識において実際にいかなる困難が生じているのかについて十分に論考がなされているとは言えない状況にある。たとえば先に参照した全国保育士養成協議会の調査が対象とするのは、指導的立場の保育士（全国保育士養成協議会 2013: 19）であり、言うならば「専門性」を伝達する側の保育士への調査に留まっている。自らの「専門性」の未熟さを実感し、そこで保育労働の「専門性」をめぐる困難を感じている、「専門性」を伝達される側の保育士の認識は、ほとんど明らかにされていない。

例外的に、高平ら（高平ほか 2015: 97-113）によってなされた研究では、回顧的な意識調査に基づいて、保育労働の「専門性」に関わる困難への論考がなされている。「専門性」を伝達されていた側の保育士への調査に基づいた論考であり、本研究の目的においても重要なものである。とはいえしかし、回顧的な調査である点に限界があろう。すなわち、新任・若手の保育士であった過去を回顧して回答した場合と、今まさに新任・若手の保育士として困難を抱えている場合とでは、困難の認識にどうしても差異が生じうるわけであり、保育士が入職直後に感じている困難をアクチュアルに捉える上では限界がある。

しかしながら、ここまでに見てきた先行研究が示すような、保育の離職が問題とされる現状においては、あるいは保育士としての「専門性」をめぐるギャップの解消が重視される現状においては、新任・若手の保育士が今まさに抱えている困難のアクチュアリティを明らかにすることもまた必要であろう。また、保育労働の「専門性」をめぐる困難がどのようなものでありうるか、先行する調査の蓄積が少ない現状では、「探索的データ解析」（樋口 2014: 6）の観点から分析を行うことが必要となる。

そこで本研究では、入職後おおむね2年未満の保育所保育士（以降「新任保育士」と表記する）に対する調査を元に、新任保育士たちが、保育の専門家として担うことになった専門的業務のど

の部分にどのような戸惑いを覚え困難を抱えているのかを明らかにすることとしたい。

このことには、既に見てきたように、従来とは別角度から保育士養成課程と「現場」とのギャップを照射する点で保育学的に意義があることであろう。また加えて、本研究は、労働環境とは異なる観点から保育労働の困難を明らかにするものでもある。このことは、保育労働をめぐる様々な困難を腑分けし、それぞれの困難について解消すべき方図とそれを担うべき主体を検討することにもつながり、その点でも意義深いものと言えよう。

## 2. 調査の概要と分析方法

本研究は、山口県ひとづくり財団が2015年に実施した、平成27年度保育所新任職員研修「保育記録を書く理由、その意義と目的」(今村方子講師)において実施された調査に基づいて分析を行う。質問文は「新任保育士としてこれまで困ったこと(保育記録を書くうえではなく、保育の現場で困っていること)について箇条書きでお書きください」というものであり、園児名や地名などは回答者自身によって匿名化され、自由記述で答える形式となっている。調査趣旨の説明は明記されており、調査への協力を承諾した場合に回答してもらうこととなっている。

回収された調査票は111通であり、研修参加者全員より回収されているが、いくつかの講座から選択して参加する種類の研修であるため、またそもそもは山口県内の保育士を対象に実施された研修であるため、本研究が設定している母集団を反映しているとは言えない。とは言え、新任保育士側から見た職務上の困難を明らかにする上での示唆を得ることはできるだろう。

分析については、計量テキスト分析ソフトであるKHcoderを用いる。KHcoderは、樋口耕一が開発したフリーソフトである。このソフトは、テキストデータを単語レベルに分解し、各単語の出現回数のカウントや、出現をめぐる単語同士の共起関係(どの単語とどの単語が同時に使われやすいか、それはどういう文脈で見られるかなど)を統計的に示すことができるソフトである。ただし注意しておかないといけないのは、このソフトはあくまでも分析支援ソフトであり、出てきた結果を考察するのはあくまでも研究者に依存していることである。すなわち、このソフトを用いたからと言って分析が絶対的なものになるとか、客観的なものになるといったことはない。出現・共起しているどの単語に注目するのか、その意味は何かを考えるのは研究者である。とは言え、こういったソフトを用いることには意義もあり、第1にソフトを用いることで、ブラックボックス化されやすい質的データへの分析過程を明示することが可能となり、反証可能性を担保できること、第2に、まだ十分に開拓されていない論点についての「探索的データ分析」が行いやすいことが挙げられる。本研究でもこの2つの意義を重視し、同ソフトを用いて分析を行うこととした。

### 3. 分析の結果

ここからは分析の結果を示していくこととしたい。まずはデータの全体像を示す。

自由回答の結果をテキスト化した際のデータ容量は48KBで、総出現語数は14546語、異なり語数は1375語、文数は731文であった。

自由記述の中に頻出した語を示すと、以下の表の通りである。

表1：頻出語と出現回数（上位25語）

語	回数	語	回数
子ども	233	食べる	37
対応	108	言う	36
子	92	活動	34
分かる	88	困る	34
保育	83	多い	34
保護者	74	他	31
自分	59	難しい	31
言葉	55	話	30
聞く	48	良い	29
伝える	42	先生	27
声	41	クラス	26
行事	37	泣く	25
仕方	37		

続いては、このデータをカテゴリー別に集計することとしたい。本研究では、担当児童の年齢で、3歳未満児クラス（以降「未満児クラス」と表記する）、3歳以上児クラス（以降「以上児クラス」と表記する）、フリー（担当クラスを決めず補助として入る）の3つに分けた。未満児クラスに該当する対象者が83名、以上児クラスに該当する対象者が27名、フリーが1名である。まずもってこの点から、新任保育士は未満児クラスに配属される傾向があることがうかがえる（結果a）。

さて、カテゴリー別に特徴的に現れた語を見てみると以下の通りとなる。なお、フリーについては回答者数が1のため、以降の分析からは外すこととする。

表2：各カテゴリーの特徴語上位5語<sup>(2)</sup>

未満児クラス		以上児クラス	
保護者	.479	子ども	.258
分かる	.409	聞く	.245
子	.389	対応	.243
行事	.261	言葉	.232
伝える	.244	保育	.231
先生	.233	話	.220

ここで、どのような文脈でこれらの語が出ているのか確認するために、元の文章に立ち返りながらそれぞれの特徴語を見ていくと、それぞれ以下のような使用がなされていることが分かる<sup>(3)</sup>。なお、「子ども」「子」は別単語としてカウントされているが、語の意味から判断して同一のものを指しており、各カテゴリーにおける「特徴語」とするのは困難があると思われたため、以降の分析では省略する。

表3：各クラスにおける特徴語の例

未 満 児 ク ラ ス	「保護者」	「 <u>保護者</u> への対応（子どもの病気（症状）や成長について聞かれた時に答えることが難しい時がある）」 「居残りの際に他クラスの子とも <u>保護者</u> の顔が一致しなかったこと」 「 <u>保護者</u> の方から行事のことなど聞かれ、すぐに答えられなかったこと」 (以下略)
	「分かる」	「なぜ泣いているのかが <u>分からず</u> (ミルクか、眠たいのか、甘えたいのか…)対応に戸惑った」 「毎年ある行事の様子が <u>分からず</u> 上手く動けない」 「子ども同士の物の取り合いなどの事柄に応じてどう対応すればよいか、どの程度注意すべきかがよく <u>分からない</u> 」 (以下略)
	「行事」	「毎年ある <u>行事</u> の様子が分からず上手く動けない」 「園内のあらゆる物の保管場所が <u>分からず</u> 、 <u>行事</u> の際の忙しい時も聴かなくてはならないことが多く、タイミングもつかみにくかったこと」 「 <u>行事</u> の動き（運動会等）」 (以下略)
	「伝える」	「 <u>保護者</u> と話をする時に、どこまでのことを聞き、話しても良いのか考えていると、結局何も <u>伝える</u> ことができずにいる」 「2・3歳の子たちがけんかをしたとき、なぜいけなかったのか分かってもらうために簡潔に <u>伝える</u> 言葉がけを知りたいです」 「 <u>保護者</u> と会話をする時に、子どもの様子をどのように <u>伝える</u> べきなのか、いつも悩みます」 (以下略)
	「先生」	「 <u>先生</u> によって指導が異なるときどうしたらいいのか」 「子どもの名前が分からず、他の <u>先生</u> 方と比べ名前を呼んで接することができなかったこと。」 「特に行事前、行事中は、初めてのことはばかりで、先輩の <u>先生</u> を見様見真似で動くようにしたが、何が分からないのか自分でも分からず、上手く質問していくことも難しかったこと。」 (以下略)
以 上 児 ク ラ ス	「聞く」	「園の制度や行事について <u>聞かれた</u> 時」 「ベテラン保育士の時は話を <u>聞く</u> A君ですが、私の場合はすぐに立ち上がりウロウロしたり、周りの子どもと話したりする」 「 <u>昨年</u> の状況が把握できておらず、 <u>保護者</u> から <u>聞かれた</u> 時にすぐ答えられない」 (以下略)
	「対応」	「 <u>噛み癖</u> のある子どもへの <u>対応</u> 」 「 <u>保護者</u> <u>対応</u> の仕方」 「 <u>甘え</u> のある子どもへの <u>対応</u> の仕方」 (以下略)

「言葉」	<p>「子どもが絵を描く時にどこまでの<u>言葉</u>かけが必要なのか」                  「子どもたちへの<u>言葉</u>かけが否定的になってしまったり、させてしまう保育になったりする」                  「自分自身の<u>言葉</u>を強く伝えすぎてしまうことがあったので、子ども自身がしっかり考えて、気付けるような<u>言葉</u>かけができるようにしたい」                  (以下略)</p>
「保育」	<p>「<u>保育</u>個人要録の書き方」                  「ベテラン<u>保育</u>士の時は話を聞く A 君ですが、私の場合はすぐに立ち上がりウロウロしたり、周りの子どもと話したりする」                  「先輩保育士より早く行動しようと思っても、自分の行動が正しいのか、また、ふさわしいのかが分からず、戸惑ってしまうことが多い」                  (以下略)</p>
「話」	<p>「ベテラン保育士の時は<u>話</u>を聞く A 君ですが、私の場合はすぐに立ち上がりウロウロしたり、周りの子どもと<u>話</u>したりする」                  「色々な先輩保育士から<u>話</u>を聞いたり、相談したりするが、色々な意見があり、何がいいのか分からなくなることがよくある」                  「<u>話</u>をすると、途中からゴソゴソして落ち着いて<u>話</u>を聞くことが難しい子がいる」                  (以下略)</p>

それぞれのカテゴリーにおける特徴語は以上のような文脈で出ている。これだけではまだ分かりにくいので、それぞれのカテゴリーで、どの語とどの語がセットで出現しているのか、共起を図示してみたい。5回以上登場している語の共起を見ると、次の図ようになる。

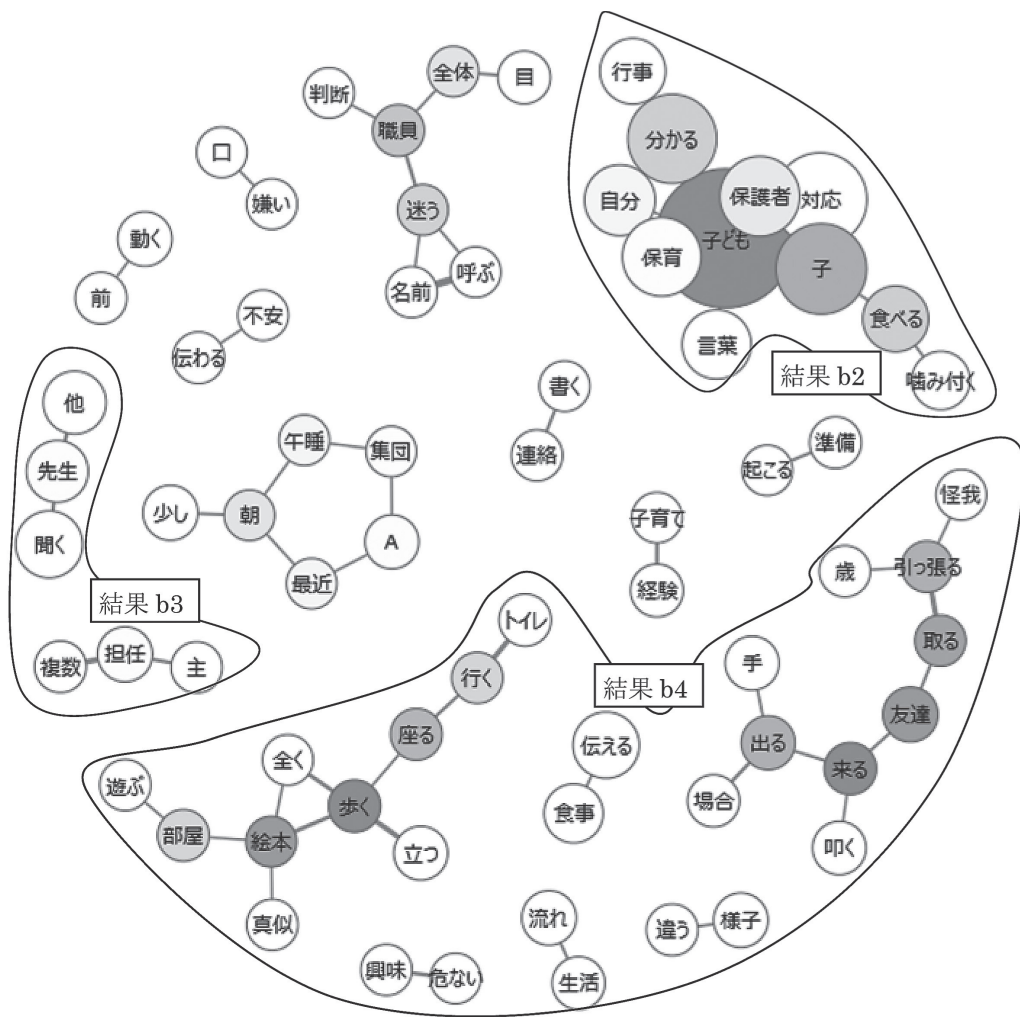


図 2：未満児クラスにおける共起ネットワーク<sup>(4)</sup>

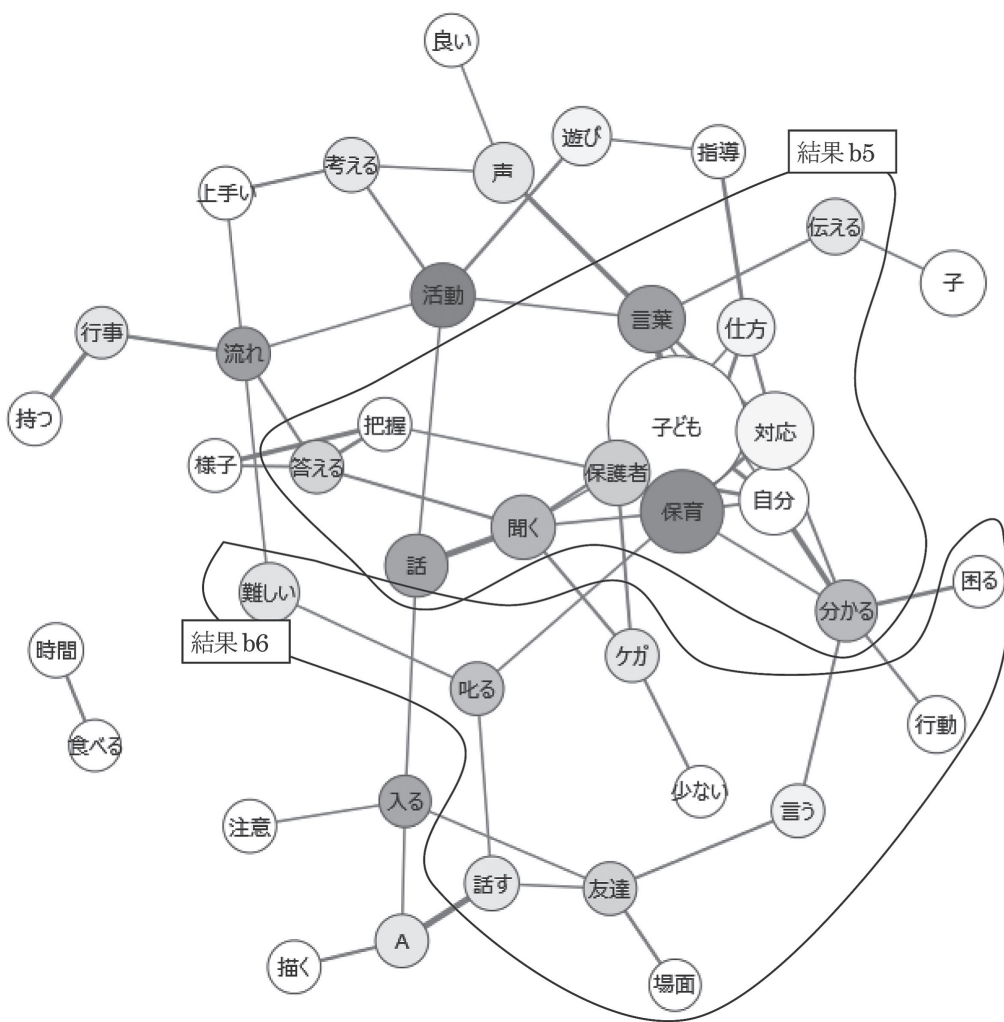


図3：以上児クラスにおける共起ネットワーク

これらの結果と表3から見るに、まず未満児クラスに勤務する新任保育士と以上児クラスに勤務する新任保育士では困難に差異があることが分かる（結果 b1）。その上で、未満児クラスでは、第1に保護者も育児経験が浅いため子どもの様子の伝達や育児方法の指導も含めた“保護者対応”に悩みがあること（結果 b2）、第2にクラスを主として担当する他の保育士との“職場内連携”に悩みがあること（結果 b3）、第3に言葉による意思疎通が難しい年齢の“子ども理解”に悩みがあること（結果 b4）がうかがえる。

また、以上児クラスでは、第1に子どもの自我が強まり始めるために“子どもに対する指導”



の方法において悩みがあること（結果 b5）、第 2 に子どもが仲間集団を形成し始めるため、子ども同士のトラブルや、気になる子どもの行動への対応など、“子どものトラブル対応”に悩みがあることがうかがえる（結果 b6）。

#### 4. おわりに：結果と考察

ここでは、以上の結果をまとめた上で考察を加えることとしたい。

本研究で行った分析から、以下の 2 つの結果が得られた<sup>(5)</sup>。

結果 a		新任保育士は未満児クラスに配属される傾向がある
結果 b	1	未満児クラスと以上児クラスでは悩みに差異がある
		未満児クラスでは
	2	・“保護者対応”
	3	・“職場内連携”
	4	・“子ども理解”に困難
		以上児クラスでは
	5	・“子どもに対する指導”
	6	・“子どものトラブル対応”に困難

それでは、以上のような結果がなぜ得られるのか、こうした結果が生じた背景から考察していきたい。それによって、今後の困難の解消に向けた議論の土壌を築くことが可能となるからである。

結果 a については、保育所の設置基準と、それに付随した OJT の観点から導かれていると思われる。

保育所の設置基準は、児童福祉法 45 条と、それを受けた厚生省令「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」によって規定されている。そこでは、

保育士の数は、乳児おおむね三人につき一人以上、満一歳以上満三歳に満たない幼児おおむね六人につき一人以上、満三歳以上満四歳に満たない幼児おおむね二十人につき一人以上、満四歳以上の幼児おおむね三十人につき一人以上とする。

との規定があり（第 33 条の 2）、すなわち未満児クラスの方が保育士 1 人当たりの受け持ち子ども数が少なく、必然的に「複数担任」制になる可能性が高まる。経験の少ない新任保育士に主たる担当をさせるのは不安が生じるし、また、他の保育士と複数でクラス担当を担わせることで OJT の日常的遂行も見込める。こうした点から、結果 a が導かれているのだろう。この結果は、新任保育士が感じる保育労働の「専門性」をめぐる困難そのものを示してはいないが、養成課程

と保育現場とのギャップが存在することと、そのギャップの中に置かれる新任保育士の状況を現したものであると言えよう。

また、結果bについては、子どもの発達段階の違いによって導かれていると思われる。つまりは、子どもがまだ言葉によるコミュニケーションをそれほど取れない未満児クラスであれば、子どもが何を言いたいのか言葉以外から推察することの困難（b4 “子ども理解”）が生じるし、また、子どもそのものへの対応よりもむしろ、保育の周辺にいる、保護者（b2 “保護者対応”）や他職員とのやり取り（b3 “職場内連携”）に困難を感じるようになる。一方で、子どもが言葉で自己主張を始める以上児クラスになると、子どもそのものへの指導（b5 “子どもに対する指導”）や、子ども同士のトラブル（b6 “子どものトラブル対応”）に困難を感じるようになるということである。

以上のように腑分けすると、結果b1～b6は、これまで指摘されてきたような職場における人間関係上の困難と、子どもと関わる保育労働そのものに起因する困難とにまたがるものであるとことが見えてくる。すなわち、新任保育士が保育労働の「専門性」に関して困難を感じがちなものは、未満児クラスであればb2とb4の部分にあり、以上児クラスであればb5とb6の部分にある。b3については、保育労働の「専門性」に関わる部分もあろうが、どちらかと言えばこれまでの研究で指摘されてきた労働環境上の困難であると言えよう。従来の研究で、養成課程と保育現場にはギャップがあることが指摘されてきたが、そのギャップの具体的な部分は、以上のようなものとして示すことができる。

以上のようなことが本研究からは明らかとなった。最後にこの結果から導かれる提案を2点示して本研究を終えることとしたい。

第1に養成課程において、学生たちに、保育現場では配属される子どもの年齢によって生じがちな困難が異なることを示し、それへの対応策を検討することを提案したい。たとえば、入職直前の学生たちに、配属される子どもの年齢によって生じる困難の違いと、それぞれの困難への対処法を示唆すること／あるいは示唆してくれる社会的資源の存在を伝達することである。社会的資源としては、たとえば保育士の研修機能も担っている子育て支援機関や、園内外の研修の存在が想定できよう。こうすることにより、困難を入職前に認識し予見することが可能となるし、困難に実際直面した場合も対応可能性が拡大する。困難に直面した保育士に対する研修のあり方や効果が議論されているが（浦井 2008）（原 2014）、こうした機会があることを養成課程において示すだけでも、入職後の困難は一定程度低減されるだろう。

第2に、保育士養成課程と保育現場双方に対して、保育士養成課程を修了した後も、新任保育士が感じている困難を養成課程側が聞き取り、それを保育現場に返し、ともに対応を講じるといった方法の採用を提案したい。言わば、養成課程と現場との、困難の共有と対策の協同検討である。こうすることで、新任保育士も保育現場以外の相談の窓口が得られるし、養成課程と保育現場と

の連携強化にも繋がりを。保育において知り得た情報の守秘義務に抵触しないようにしつつ、新任保育士を養成課程と現場とが協働しながら支える仕組みを築くことで困難を解消する可能性が拓けよう。

本研究では、新任保育士が直面する困難を腑分けし、保育労働の「専門性」をめぐる困難を探索的に明らかにしてきた。従来指摘されることが多かった、保育労働の環境上の困難は、今後解消すべき課題である一方で、保育士養成課程や保育現場そのものが解消に携わることはなかなか難しく、政治的に解決を求めるしかない部分が多い。しかし、保育労働の「専門性」をめぐる困難は、保育士養成課程と保育現場とがかなりの部分解消に関わるものであろう。以上のように、本研究は、調査上の制約があるとはいえ、今後保育士養成と保育現場とが検討すべき課題を示すことができた点において重要なものである。今後さらなる調査を展開しながら、議論の精緻化を進めたい。

#### 注

- (1) なお全国保育士養成協議会によるこの報告書では、保育士の「専門性」を、『保育所保育指針解説書』の以下の文章に依拠して定義している（全国保育士養成協議会 2013: 14）。

保育士の専門性としては、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術などが考えられます。

こうした「専門的な知識・技術」をもって子どもの保育と保護者への支援を適切に行うことは極めて重要ですが、そこに知識や技術、そして、倫理観に裏付けられた「判断」が強く求められます。日々の保育における子どもや保護者との関わりの中で、常に自己を省察し、状況に応じた判断をしていくことは対人援助職である保育士の専門性として欠かせないものでしょう。（厚生労働省編 2008: 19-20）

- (2) ここでは、Jaccard 係数を用いて特徴的語を示している。Jaccard 係数は 0～1 の間を取り、数値が大きいほど特徴的であることを意味する。
- (3) なお、これらの特徴的語が、別のカテゴリで登場すること（たとえば未満児クラスで「子ども」が出現すること）も当然ある。この表が示しているのは、そのカテゴリ内でその語が登場したか／しないかではなく、その語が特徴的に登場しているかどうかであることを注意されたい。
- (4) 図中の線が太いほど共起が強く、円が大きいほど出現回数が多く、色が濃いほどネットワークの中で中心的であることを意味する。
- (5) なお、この結果は、未満児クラス担当の新任保育士と以上児クラス担当の新任保育士それぞれに特徴的に見られる困難が抽出されたことを示している。未満児クラス担当の新任保育士が抱える困難が、

以上児クラス担当の新任保育士には存在しないということではない。

#### 文献

- 萩原修子・増淵千保美, 2012, 「女性の労働環境の改善に向けて——保育士の健康と労働・くらしの実態調査をもとに」『社会福祉研究所報』40:67-109.
- 原孝成, 2014, 「インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが 新任保育士の専門的発達に及ぼす効果」『鎌倉女子大学紀要』21:43-54.
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 厚生労働省編, 2008, 『保育所保育指針解説書』フレーベル館.
- 西阪小百合, 2010, 「若手幼稚園教師の精神的健康に及ぼすストレスと職場環境の影響」『立教女学院短期大学紀要』42:101-110.
- 高平小百合・若月芳浩・佐久間裕之・宮崎豊・工藤亘, 2015 「私立幼稚園教諭における職務上の困難——新任時と現在の分析」『論叢：玉川大学教育学部紀要』97-113.
- 東京都福祉保健局, 2014, 「東京都保育士実態調査報告書」(<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2014/04/DATA/60o4s201.pdf>: 情報取得 2016/7/18).
- 浦井伸子, 2008, 「新任保育士研修報告」『横浜女子短期大学研究紀要』23:39-59.
- 全国保育士養成協議会, 2013, 『平成 24 年度専門委員会課題研究報告書「保育者の専門性についての調査」——養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み』一般社団法人全国保育士養成協議会.